



010 A-works

architect: arita yoshitaka, director: aizawa kumi, planner: baba masataka, photo: mitsuhashi jun

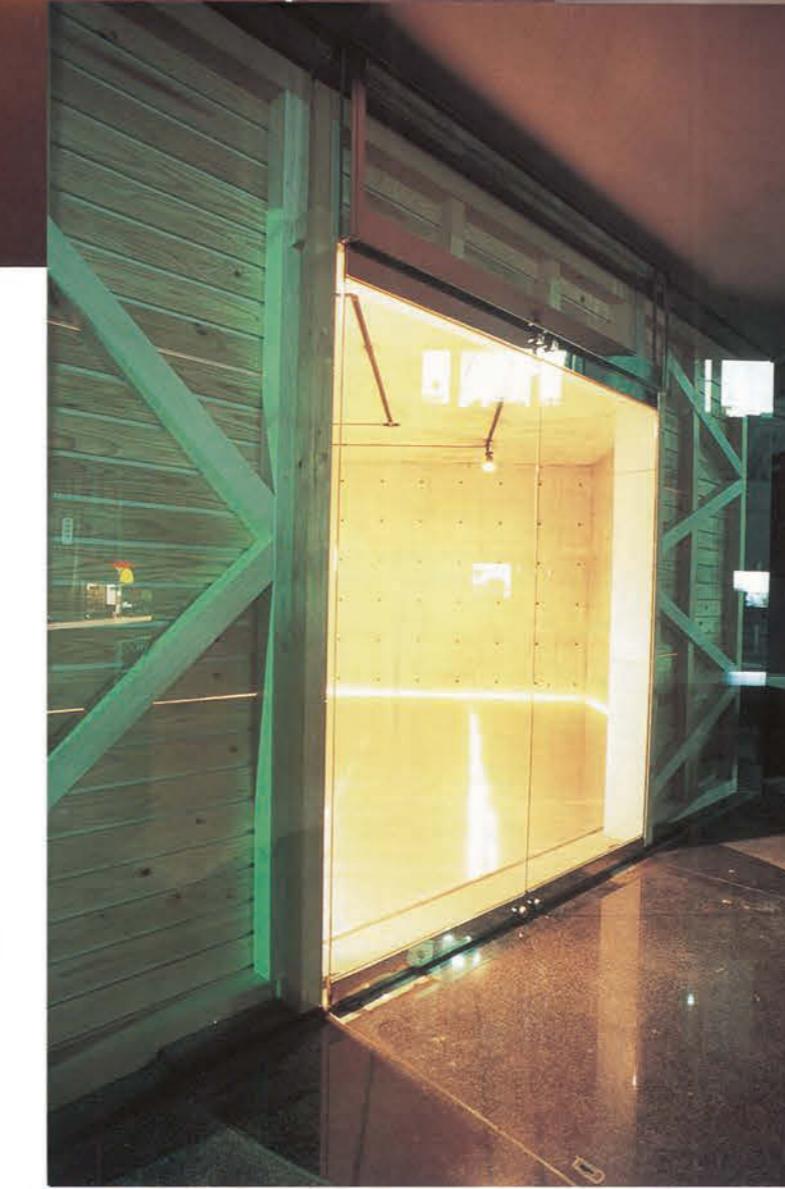
ambience cafe project 中間報告

アンビエンス・カフェをつくろうという話から始まったこのプロジェクトは、その後クライアントの要望によりプログラムとデザインに変更が加えられ第1期工事に入った。基本的には営業は考えないで、内部の打ち合わせに使えたり、スタッフが夜、酒が飲めるようなスペースであればいいということ。そしてそのために夜でも外から見えないようにガラス面を塞いでほしいということが主な要望だった。

「バカやってるよ」というのが褒め言葉になっている会社がクライアントの場合、その内装を設計するにあたっては、僕らもやっぱり良い意味での「バカ」にならなければいけない。これはなかなか難しい。

そういういろいろ作戦をねる。「ガラスをフィルムやロールスクリーンで塞いだら、それは常識的すぎるでしょう」「壁をつくろう」「んー、それも偽のコンクリート打ち放しの壁」「いいねー。コンクリートの型枠の目地から光が漏れてたりして」「下地はどうする?」「木下地で木摺りなら外から見えてきれないだし」「じゃあ筋交いがいるね」「筋交いが"B" "D" "I"って文字になっているっていうのはどう?」「おー、サインになってるんですね」

こうして、裏方の造作がファサードに向いて、さらにサインになっていて、内側に回ると本物のコンクリート打ち放しの壁が、何故か偽もののコンクリート打ち放し壁に切り替わっていて、そのイミテーションの打ち放し壁の型枠目地から光が漏れているという、ちょっと変わった目隠し壁が出来上がった。

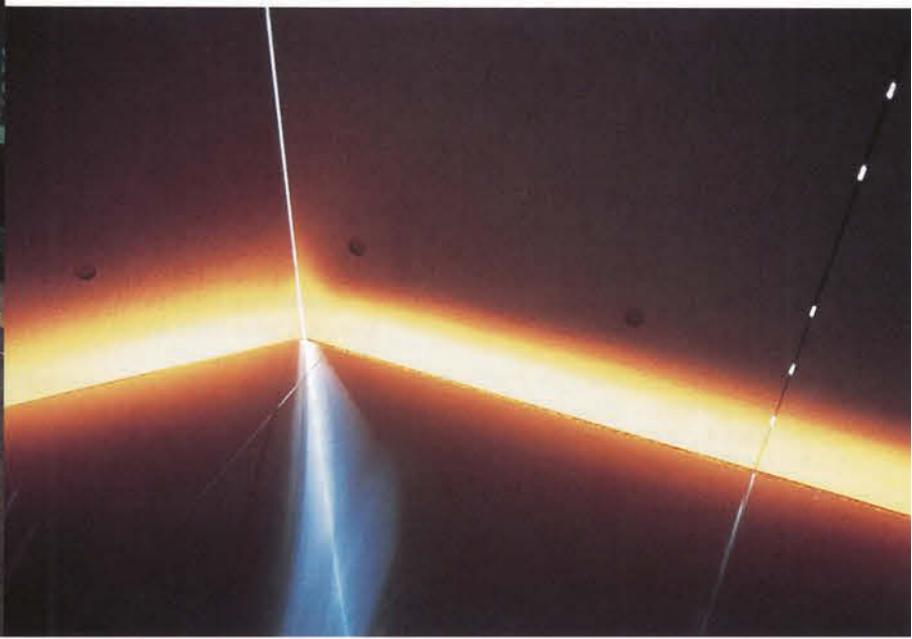


床に関しては、将来的に入れる家具のためにフラットに仕上げたかったのと、光の効果を考えてアルミ板を敷き詰めることにしたが、既存の床の段差を吸収するために、どうしても50ミリほど床を浮かさなければならなかったのと、既存の壁と縁を切って施工したかったとの理由で、床と壁との境目に小さな溝ができることになった。

「カベとユカの間にできてしまったこの溝は、もう埋められないんだろうか……」「いいえ、そんなことはない」ということで、アルミ床の周囲の溝には間接照明が仕込まれた。我々は無事、光明を見いだし溝は埋められた。

こうして出来上がった床と壁を見ながら、第2期工事の打ち合わせをした。
「んー、やっぱり営業するカフェバーにしようかなー」とクライアント。

ありふれたことでは満足しない、常にそこにウイットと斬新さを求める人たちがクライアントの、このプロジェクトなのである。



A-works 008 FIRM ROOTS

design: arita yoshitaka, director: aizawa kumi, planner: baba masataka, photo: KATSU

新しいなにかをつくることを放棄し、そこで手を止め、時間を止める。その偶然性を凍りつかせ保存すること、それが時代と空間なので本音だらうか。ここでの仕事は、解体されたトンネル状の工事現場の両端を二枚のガラスによつて表す、それ以外の意図的な作業を排すことだった。

冬のある日、置き去りにされていたアパレルメーカーの事務所の内装を解体した。解体業者（破壊を専門とする職人。なんとカッコいい職業）がやってきて、奇妙な姿をした解体マシン（ものを破壊するためだけにつくられた機械。なんと美しい装置）によって、その空間は瞬く間に壊されていった。解体された後に姿を現したのは、幾重にも塗り重ねられた壁紙や塗装、いくつものアンカーの痕跡、80-90年代の間に、何度もつくっては壊してを繰り返した放蕩の時代の美しい画面。暴力的に露呈されてしまったこの空間を、そのままのかたちでフレバーフ化することは、この場所と空間と、そこに並ぶことになる衣服の特性を的確に引き出す方法ではないか。そう考えデザインをいったん放棄し、そのままのかたちで保存することとした（もちろんクリアすべき技術的な問題や経済的な問題は山ほどあるのだが）。



解体前



解体後

2040



有田佳生 yoshitaka arita
1967年生まれ 建築家
早稲田大学建築学科大学院終了
ロンドンAAスクール卒業
設計事務所勤務後 独立

代官山のすこしあはずれ、細い坂道をクネクネ下った突き当たりにある築30年のビルの1階に、ストリートカジュアル系の服を売るショップをつくりたいという話を聞いて、最初にこの場所を見にきた時には、その内装はかなりつくり込まれていて、入り口は狭く閉鎖的で、内部も細かく区切られていた。そこは10年ほど前、バル後期につくられたアパレルメーカーの事務所だったらしい。うまくショップとして再生できるのかしらと思ったのだが、かろうじて手に入れた30年前に引かれた何枚かの青図か、どうも元々のコンクリート構造躯体はかなりシンプルで、解体してしまえば、とても魅力的な空間が出現することが分かってきた。

この建物は、平行する2本の道に挟まれた形で2面のファサードを持つ。つまり、この1階をぶち抜いて2本の道をつないでやれば、通り抜けできるブリッジホームみたいな素敵

な場所が出来上がるのだ。そこをショップにしたかった。それで解体しようということになった。

昔の図面から、壁の中に3つの窓と1つの扉が隠れていること、道路に面する躯体開口がもっと大きくなるはずだということなどは分かったのだが、ダニエル・ビュラン調の壁紙が出てくるなんていうところまでは、ちょっと予想できなかった。「おいおい、いったいここは何屋だったんだ!」という感じで何層にも重ねられた壁紙や塗装は、これまでのこの場所が纏ってきた出来事の変遷を物語っていた。

このすっかり裸になったスケルトン状の現場は、僕たちのお気に入りである。古いビルの1階に突然ぼっかりと穿たれた穴は、圧倒的に迫力があって、それだけで十分魅力的なのだ。今回の計画では、あまりつくり込まないで、手を加えるところを最小限にして、この穴をショップに仕立てようと思っている。

“決めすぎないこと”で、ある種の“軽さ”、このショップの持つ“身軽であろうとする意志”を表現できればいいと思っている。

平面はいたってシンプル。南北に通り抜ける穴をリニアに2分割して、ショップと事務所にするというもの。このシチュエーションでは、多分これしかないと違うような、はっきりした平面だ。真っ白い壁を一枚“ズズ”と挿入し、両端を“パン、パン”とガラスで塞ぐという、ただそれだけである。この“ズズ”“パン、パン”がうまく表現できるかどうかが、この計画の命なのである。

1999年5月、この場所はショップとしてオープンする。

解体現場を利用して、4日間だけプレオープンの展示会を行うことになった。僕たちにとっては嬉しいハプニングだ。足場を組み、工事用の防護ネットをスクリーンとして、完成形をシミュレーションしてみた。

夕刻の薄明りのなかでボンヤリと浮かぶ解体現場と、そのスクリーンの向こう側を泳ぐ人影は、狂乱の時代として歴史に記されることになるであろう、刹那的な80-90年代の幻影を見ているようだった。その風景があまりに奇麗で、「もしクライアントが『このままいい』なんて言い出したらどうじゆう。仕事なくなっちゃうよ」などと冗談を言いながら（実際、その時は冗談でもなかつたのだけど）、やはりこの魅力的なトンネルは、できるだけそのまのかたちで残してゆくことを再確認したのだ。

A-works

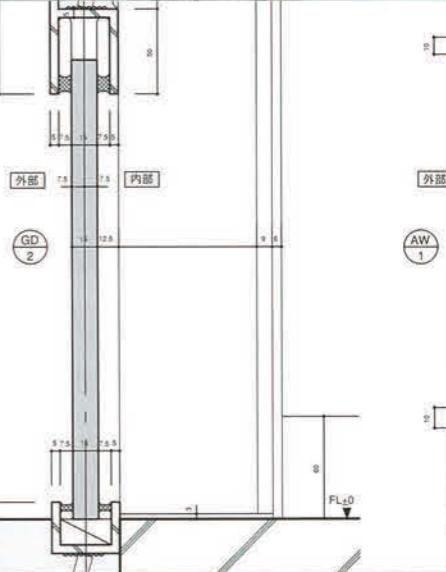
building is editing

都市を編集する作業。
それは、様々な偶然の出来事を紡いで
必然へとつくり変えていく作業である。

いくつかのプロジェクトが我々の周りで発生し始め、
それらに様々な役割でかかわりを持つ機会が増えている。
企画、設計、デザイン、コーディネーション、出版、力仕事、等々。
そのかかわり方が多様であればあるほど、
それらの組み合わせの可能性も広がっていく。
単独のプロジェクトでは解決できないような問題も
複数のプロジェクトを結び付けることで
劇的に糸口を見いだすこともあるし、
思い掛けなくもオモシロイ出来事が
驚くほどのスピードをもって展開していくこともある。

wild side meeting vol.1と+atdic vol.1は同じ会場で立ち上がり、
GALLERY・MAは+atdic vol.1の問題を解決し、
trans architecture展とAが結びつき1冊の本になり、
+atdic vol.2がFIRM ROOTSで開催される。

ここに紹介するいくつかのプロジェクトは、
そんな、一連の流れの中にある都市への試行の一部である。



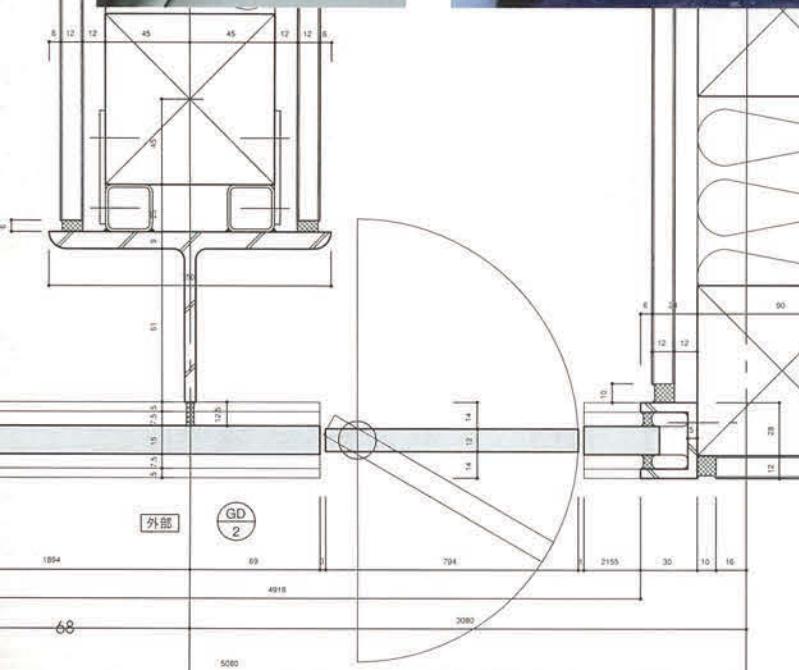
014 A-works FIRM ROOTS
architect:arita yoshitaka,director:aizawa kumi,
planning:baba masataka,photo:KATSU,arita yoshitaka

代官山FIRM ROOTSが完成した。
服飾を中心に書籍等も扱うショップだ。

築30年のビルの1階を解体してできた
トンネル状の空間。
その両端をガラスで塞いでショップをつくった。

偶然現れた解体後のスケルトンの空間、その状態をそのまま標本にしたような店にする。
それが最初のイメージだった。
時間を重ねた既存部分に対して、新しくつくるものをどう嵌め込んでいくのか、その対比のバランスをコントロールすることで、僕らの表現にしたいと思った。

スケルトンがトンネル状の物件なんて滅多にない。
それも、坂を下った突き当たりにあるトンネルだ。
だからショップになってもこのトンネルは通り抜けられるようにしたかった。



結果的に、内部は床も天井も解体時そのまま。内部を2分割し、音を遮断するために白い壁が1枚挿入された。それだけのシンプルな構成となった。もちろんショップには出入り口が2つあり、こっちの道から入ってあっちの道に出られる。その、通り抜けのトンネル状のプラットフォームに商品が配置される。

FIRM ROOTSはショップとしてだけではなく、様々な情報を発信する場として機能し始めている。



+atdic @ FIRM ROOTS

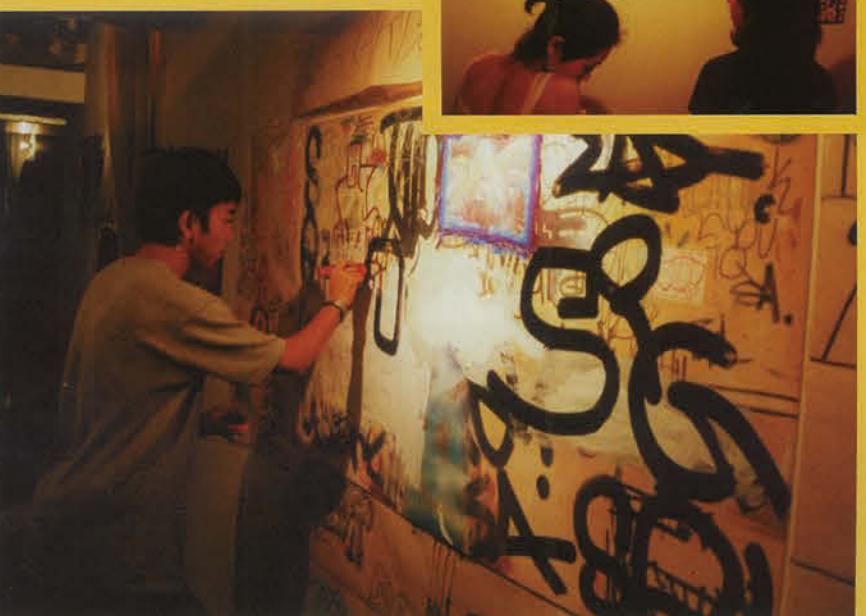
photo:arita yoshitaka

8月6日、FIRM ROOTSを会場に+atdicが開催された。

第1回目のゲストはグラフィティーアーティストの渡辺アルト。ショップ内の商品は片付けられ、プラットフォームは落書きのギャラリーになった。

仮設のDJブースとバーができ、音楽を聞きながら、ビール片手にアルトのライブペインティングを見たり、座り込んで話をしたり。そんな一晩だけの空間が出来上がった。

FIRM ROOTSはこれからも色々なタイプのイベントの場として使われていくらしい。



011 A-works

text:baba masataka, illustration:arita yoshitaka

+atdic
afterschool talk dictionary

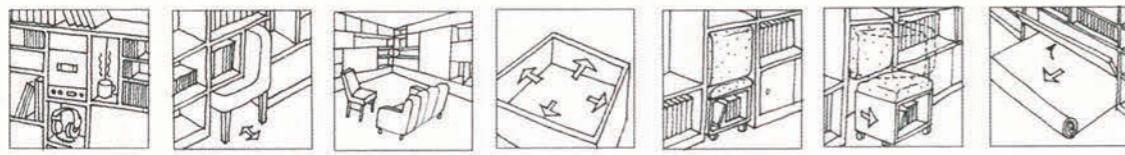
+atdic afterschool talk dictionary

Be good circulation!

継続とは偉大だということを『dictionary』を見ていて思う。

『dictionary』とは、知る人ぞ知る、もう10年も続いているフリーペーパーだ。時代を生き抜くための手段を集めた辞書、dictionary。気がつけば、そのバックナンバーは90年代の音楽シーンを中心とした人物と活動の、まさに dictionary となっている。

それを淡々と出版し続けた桑原茂一氏が、『dictionary』を、人とラジオと空間で立体的に組み立てようとするのが、afterschool talk dictionary (+atdic)。



dictionary → afterschool talk dictionary (+atdic)

「かわりのきかない個人を大切にするメディアがあつた方がいいと思っていたんだ」

12年前を振り返りながら、桑原茂一はこう切り出した。

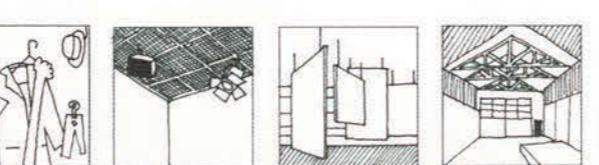
「海外のクラブシーンの動きなどを紹介すると同時に、日本でもクラブシーンや複合的なカルチャーが自然発生的に生まれることを期待して始めたのが、『クラブキング』という会社です。そのためには、メディアが必要だった。最初はいろんなメディアに「こんなことやるから紹介してくれませんか?」って頼んで回っていたけれども、本当にやりたいことを伝えてはもらえない。それで、自分たちが伝えたいことを伝えるためには、自分たちのメディアを持って表現していかないとダメだと気がついた。こうしてフリーペーパー『dictionary』は生まれたんです。」

最初のころは「そんな金にもならない仕事をなんでおまえらやってるんだ」とか、揶揄されたんすけれどね。だからこそ、自分たちにとって未来をポジティブに捉えられる知恵を満載した辞書が必要だと思っていました。有名無名を問わず表現できる、いろんな声が聞ける、こんなメディアの存在は、これからなにが新しいことをやろうとしていた人々にとって、知恵や勇気になっていたのだなと思っています。

このメディアを10年続けてみて、その部分をもっと強く打ち出せるような場が欲しい、この雑誌をこの先10年続けていけるようなリアルな場が欲しい、そう思うようになった。それが、afterschool talk dictionary (+atdic) です。

『クラブキング』では、イベントやクラブの運営をたくさんやってきました。でも、本当にやりたかったクラブのかたちを、なかなか実現できなくなってしまったんです。

+atdic は、それをクラブという形式ではなく実現しようとしているのかもしれませんね。従来のたばこの煙やアルコールの匂いや音、そういうものはなくな



A activity → afterschool talk dictionary (+atdic)

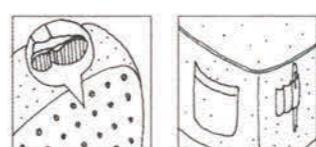
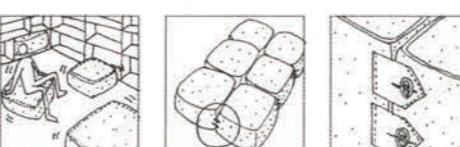
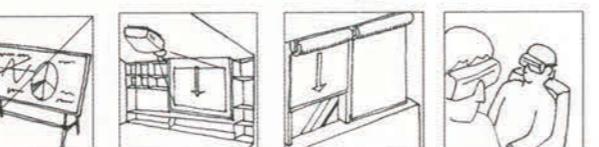
このafterschoolが行われる場所と空間計画に A activity が協力することになった。まずは場所探しから。

+atdic には、どんな人が集まり、どんなことが起こるのだろうか。どんな仕掛けがあったら楽しいだろうか。そもそも、それはどんな場所にあるのだろうか……。こんなことを空想しながら設計を行うことはとても楽しいことだ。A activity が考える +atdic へのアイデアとイメージのパズル。この場所は、教室、サロン、リビングルーム、ライブラー、カフェ……。それらの機能も持ち合わせているけれど、そのどれでもない。そこは +atdic。A activity にも、+atdic に時間ももらえることになった。この場所から「都市」の次の概念/機能/ライフスタイルを構成する新しい言語を発信したい。

— dictionary for a 3rd field.

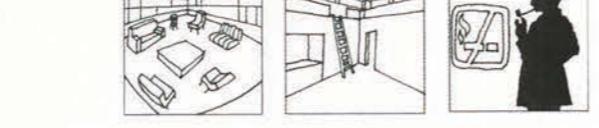
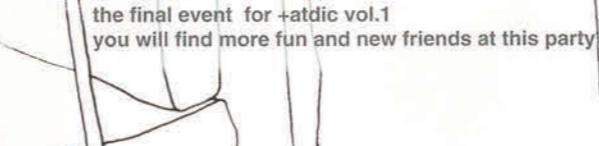
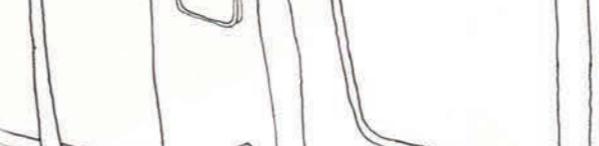
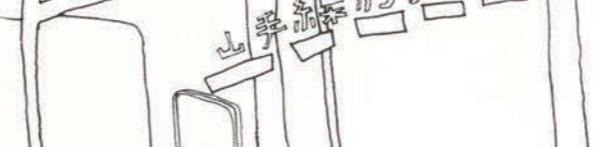
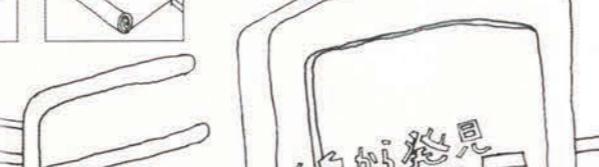
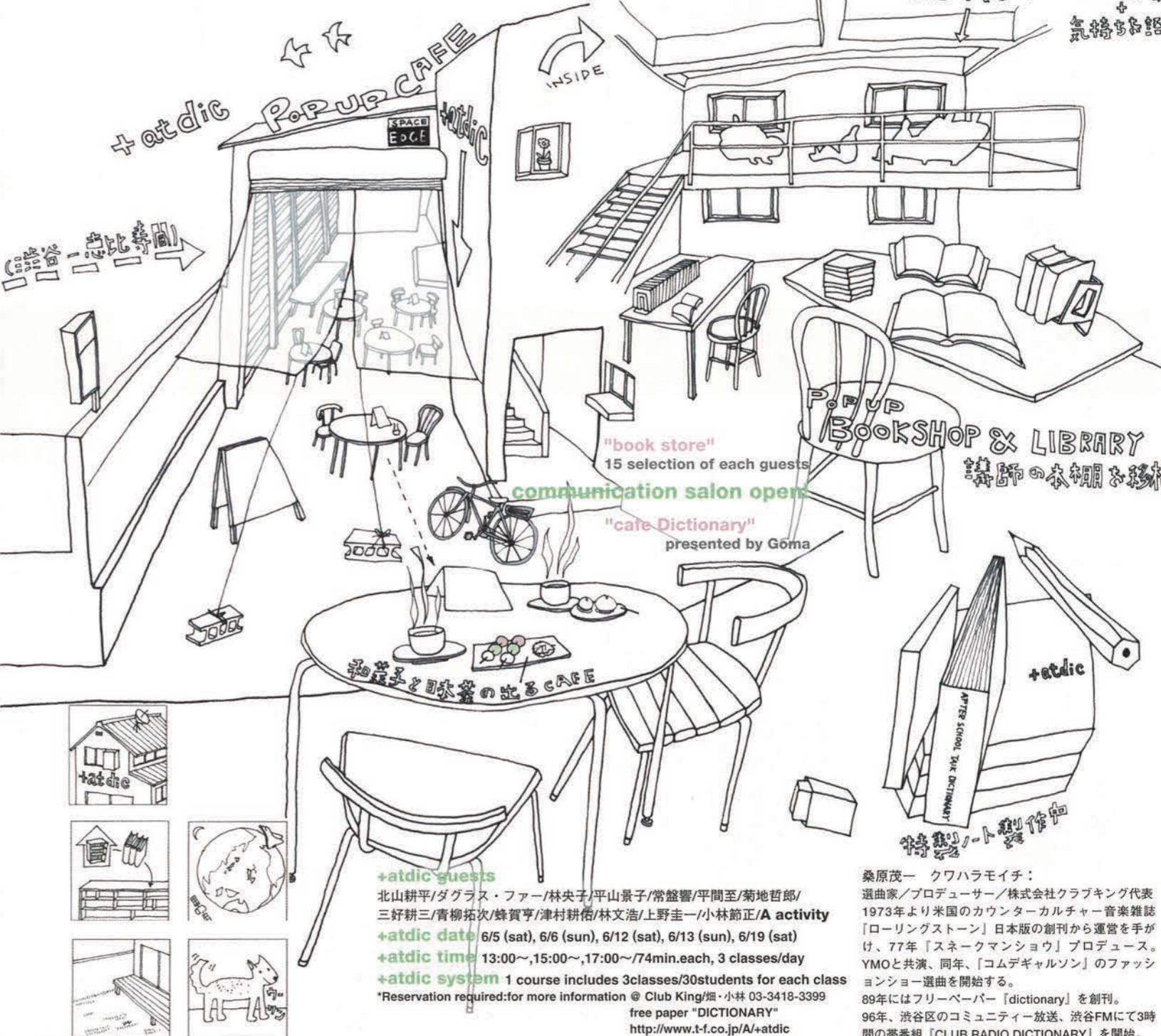
※afterschool talk dictionary (+atdic) の詳細は、

フリーペーパー『dictionary』No.0067(4月15日出版)に掲載されています。



TALK DICTIONARY SPACE

人の語を聞く
+
気持ちを語る

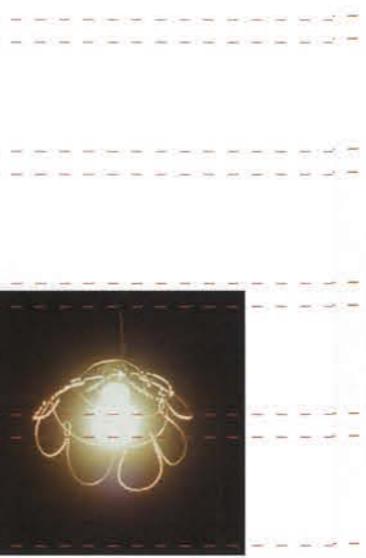


桑原茂一 クワハラモイチ:

選曲家/プロデューサー/株式会社クラブキング代表
1973年より米国のカウンターカルチャー音楽雑誌「ローリングストーン」日本版の創刊から運営を手がけ、77年「スネークマンショウ」プロデュース。YMOと共に同年、「コムデギャルソン」のファッショニヨンショー選曲を開始する。

89年にはフリーペーパー『dictionary』を創刊。

96年、渋谷区のコミュニティ放送、渋谷FMにて3時間の番組『CLUB RADIO DICTIONARY』を開始。



ダンボールで家具をつくることになったのには
ちょっとしたいきさつがある。
+atdicにはイス、テーブル、ディスプレー台の
類がかなりの数必要だった。
それをどこから手配するのか、それも安く、短
時間で組み立て解体ができ、イベント後の処分
が楽なもの。
なにしろ、毎週土曜日の朝2時間でセッティング
し、日曜日の夜2時間で解体撤収するわけである。
どうしようかと悩んでいた。
ところがこんなとき、同時進行のまったく別の
プロジェクトが偶然に繋がって、一気に問題を
解決してくれることがある。
ギャラリー・間の好意で、ある建築家が展覧会
で使った台を、その展覧会終了後、すべてただ
で譲ってもらえることになった。それがダンボ
ールでつくられた台だった。

「あのー、この台はこの後どうするんですか？」
「全部、捨ててしまします」

「あのー、これ譲ってもらえないですか？」

僕らお得意のクレクレタコラ戦法だった。

その後さらに、譲ってもらった台をすべてバラ
バラにし、組み立て式のイス・テーブルにつく
り直す必要があったが、その作業スペースもギ
ャラリー・間の一部を使わせてもらうことができた。

こうした必然のような偶然の繋がりで、材料と
お金と作業スペースの問題がいっきに解決した。
僕らは3日がかりで全てのイス・テーブルを用意
した。

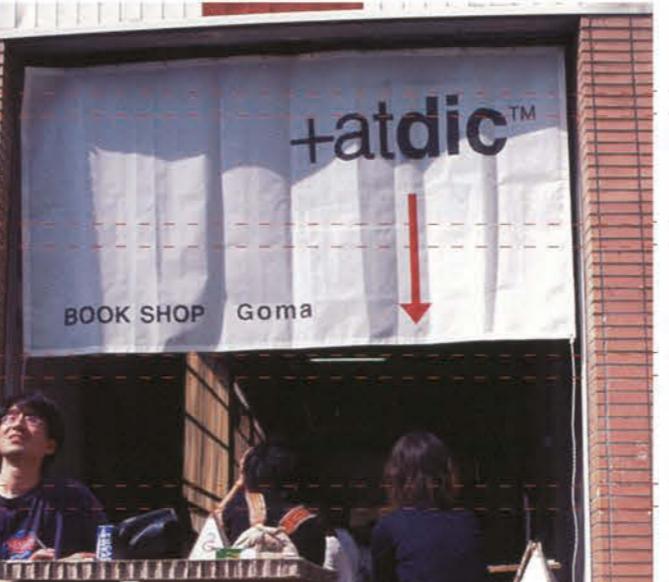
+atdic後、ダンボール家具は古紙回収者に引
き取られた。
今はまたどこかで紙になっている。もしかした
ら、Dictionary (+atdicを主催するクラブキング
のフリーペーパー) の1ページになっているかも
しれない。

017 A-works +atdic

architect:arita yoshitaka,planning:A activity

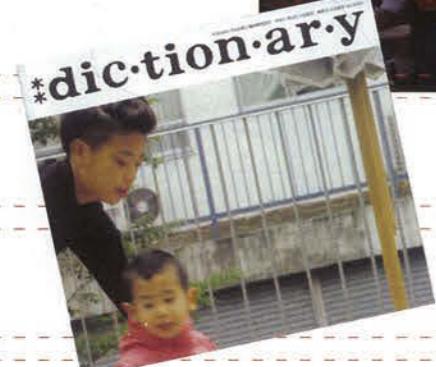
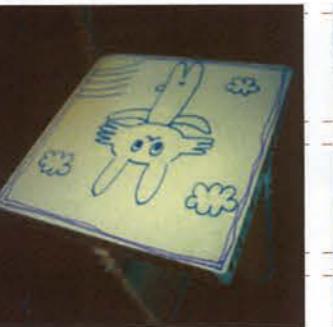
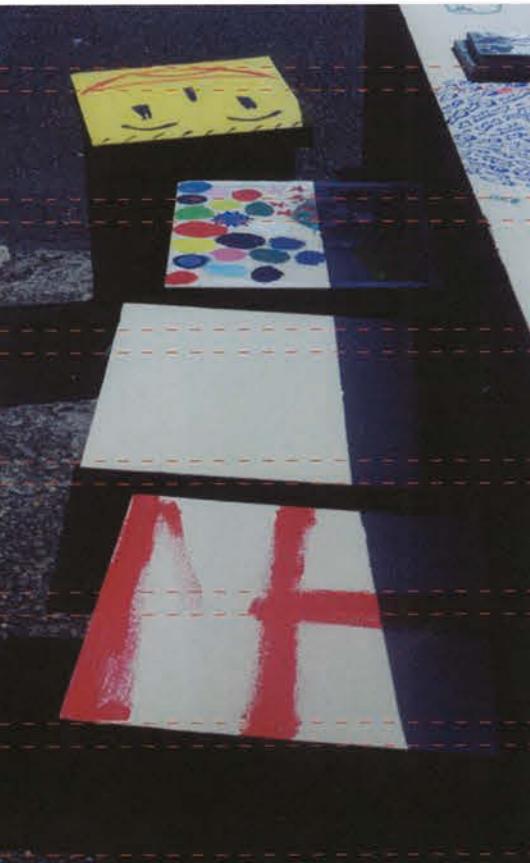
+atdicは6月中の週末、渋谷に立ち現れた。
倉庫に人が集まって、しゃべったり、話を聞
いたり、お茶を飲んだり、食べたり、本を読んだ
り、絵を書いたり、音楽を聞いたり、ボートを
したり、そんな、だらだらとまったりと時間を
過ごせるいいイベントだった。

僕たちはその空間構成もさせてもらった。
イベントの性格上、あまり無理せず力の抜けた、
居心地のいいイージーな空間にすることを試み
た。
なにしろ、場所が渋谷のスペース・エッジだ
たので、殆ど手を加えなくても充分イケていた。
倉庫に人が集まっている、その感覚
が好きだった。



カフェ、ブック・ショップはダンボールで作
ったテーブル、イスで構成した。
お料理隊のGomaは日替わりの美味しい和菓子と
お茶と一緒に、それらを乗せるダンボールのト
レーとコースターを手づくりで用意してくれた。
参加者には家具やトレーに自由に落書きして
もらった。

+atdicの日が経つにつれ、テーブルやイスはイ
ラストやメッセージで埋まっていき、このイベ
ント独特の雰囲気を加速させた。落書き上手の
集まるイベントだった。



軽い+安い+簡単 LIGHT+CHEAP+EASY

カフェ用につくったダンボールのイスの評判が良く、
現在、バージョン・アップした丸型のイスを試作し、商品化を試みている。
軽くて、安く、簡単に組み立てられるイス。
家具というよりは、文房具の感覚に近い。テーブルにもなる。
意匠登録出願予定。



Goma

Goma のおいしい料理

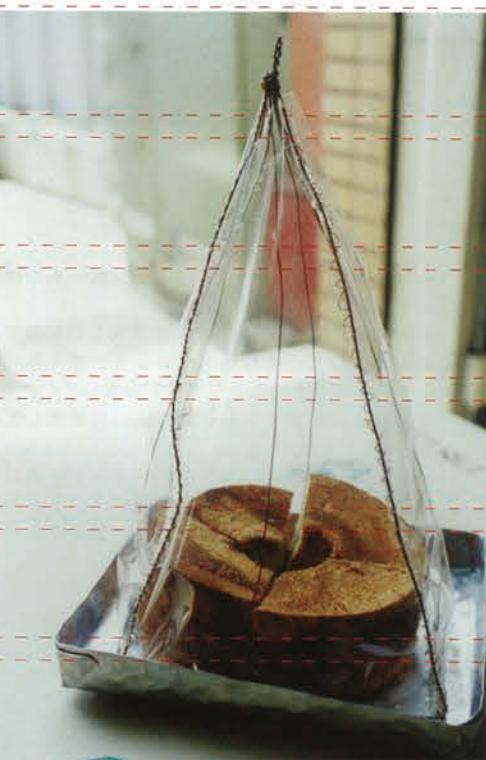
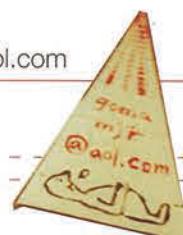
Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間

Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間にながれる楽しい時間

Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間にながれる楽しい時間がうみだす偶然の出会い

出来事としての料理、
そこに生まれる出会い、
全て Goma が大切にしたいこと

Goma : 料理ユニット gomamjr@aol.com



中村政人 アート↔都市↔建築

中村政人 nakamura masato : 1963年秋田生まれ。89年東京芸術大学院修士課程終了。89~92年韓国弘益大学院西洋学科修士課程在籍。97年ポーラ美術振興財団の助成により香港滞在。現在、ソウルアートスペース「コマンドN」代表。主な展覧会に92年「中村と村上展」(ソウル、東京、大阪)、94年「新宿少年アート」新宿歌舞伎町全域、「Lucy」SCAI THE BATH-HOUSE、白石コンテンポラリー・アート、95年「Origin of Flavor」ナビンギャラリー(バンコク)、96年「Abstract/Real」20世紀美術(ウィーン)、98年「OSC+mV」広島市現代美術館、SCAI THE BATH-HOUSE、白石コンテンポラリー・アート、キリンプラザ大阪など。

中村政人のアートとのかかわり方は様々だ。

彼は、くるくる回る床屋さんのバーバー・ポールや幹線道路沿いにそびえ立つマクドナルドのMサイン、深夜の街に乾いた光を放つコンビニの看板を美術館に持ち込んでアート作品にする。

「ザ・ギンプラート」では、アーティストを集めゲリラ的に銀座の街にアートを仕掛け、「秋葉原TV」では秋葉原中のテレビモニターを借り切って世界のアーティスト達のビデオアートを流した。

彼は同時に、都市の中でアートにかかる者たちを柔らかに結びつけるネットワーク「commandN」を主宰する。

しかし、これら全てに共通するのは、圧倒的な都市とのかかわりあいの中でそれらが生まれてきているということだ。

徹底的に観察すること柔らかい転用の発想で、都市の断片を美術館に移植し、

アートの断片を都市に移植する美術家中村政人。彼は、「都市との距離」という言葉で自らのアートを説明する。

都市との距離

——僕たちにとって「都市との距離」というのはとても興味のある問題で、例えば建築の仕事であれば、とりあえずクライアントや施工者がいたり、法規をクリアしなければいけなかったりして、そこでもう一つ都市とか社会とかとのかかわりを持てていんすけれど、アートは、より自由な分、より難しいのではないかと思う？

中村さんのレクチャーの中では、赤瀬川さんのいうトマソン的なものを自分で都市に仕掛けていくというような作品が「都市との距離を縮める」行為の例としていくつか紹介されました。まずそのあたりからお話をうかがえるでしょうか？

アートを勉強していく過程で、対象を観察してそれをなぞるような作業をしていると、ある時点でこれって本当にアートなのかな？と疑問に思うときが来るんです。大学入ってすぐくらいのころですけど。僕の場合にも同じように、自分の中に培ってきた「アート」を含みアートを形成する制度そのものを、あるときからすごく疑う目で見だしたんですね、その時に路上観察的な視点に出会った。これでもっと楽になれるっていうのがあったんです。自分の考えが先にあって対象を見つけていく、というものではなく対象または環境にアフォードされていく自己を見つめてく作業といえます。もちろん赤瀬川さんの影響はありますし、継承していく考え方だと思います。

アートに対しての不信感みたいなものは自分の作



『No Parking』 1993年 ザ・ギンプラートにて
©masato nakamura



1991年韓国ソウルにて観察された駐車禁止切り株
©masato nakamura

interview, text: arita yoshitaka



品をつくるというプロセスの中で変化してきているんですけども、その信じきれないわだかまりみたいなものがずっとあって、そこの気持ちが「都市との距離」という言葉を考える上で重要な要素になってくると思うんです。

@masato nakamura

葛飾に引っ越したのがきっかけなんです。近所のイトヨーカドーの屋上から東京の下町の風景が見えるんですよ。波が押し寄せるように家があって、高速道路が家の頭の上をピューッと走っている。そういう風景を誰がいつどういう考え方でつくり、こうなってしまったのかっていうようなことに興味を持ったんです。それでセキスイハイムのM1をつくった大野さんや工学院の吉田さん、東大の松村さんに会いに行ったり本を読んだりしました。それで“産業”として住宅が出てきたいしさつを知ったわけです。そのとき、自分がどんな反応をするのか気持ちを確かめてみたかった。街の中に漂う自分とそこに置かれたカバンとの関係はプライベートでありパブリックであったわけです。「アート」という枠からではなく、街から自己を認識したかったんです。その認識の実感のようなものが「距離感」と言えます。

@masato nakamura

道端にポンとものを置くという行為から、もう少し計画的に、「ザ・ギンプラート」でやったように展覧会としてパブリシティーを出してものを置くようになってくる。そうすると、プライベートな意識がどのように働いて街が形成されているのかが見えてくる。つくるということを自分のためだけではないステージで捉えることができる。観察をすればするほど、都市との距離感も僕の中で変化してきて、都市の創造力のようなものにつき動かされていく自己に気付いていくんです。

@masato nakamura

——最近、美術館の中に建て売り住宅を建てるという作品を計画されたと聞きましたが。

@masato nakamura

実現にあと一歩のところで中止になりました。あの作品では、代表的なプレハブ構法の住宅を美術館の中であえて建てることによって、住宅という考え方が他のジャンルとどう共有できるのかということを考えてみようと思ったんです。住宅というのは個人のスキーム形成に最も影響を与える建築であり、場所であると思うんです。だから、住宅に興味を持ち、自ずと建築にも興味を持つようになったんです。

@masato nakamura

都市のリアリティー

アトリエ・ワンの塚本さんたちがこのまえ言っていた話で、例えばデパートがあると、その屋上が自動車教習場になってたりとか、一つの機能と思われていたことがぜんぜん違う使われ方をしてしまうというようなものがありますよね。それは僕もそう思っていて、すごく共感したんです。最初の機能を勝手に逸脱して増築してしまいます。そういう面白さが都市にはありますよね。

我々は既に目の前に形が与えられていて、それに對してプラスしていかなければならない世代です。



『QSC+mV』 1998年 広島現代美術館個展での展示風景

協賛：日本マクドナルド(株)

協力：東亜レジン(株)、キリンビール(株) 企画協力：(株)白石コンテンポラリー・アート

写真：オオシマ・スタジオ 写真提供：広島現代美術館 ©masato nakamura

前建築家とか世代のやったことを全部一度きいいにして一からはじめるることはもう不可能だし、逆に

そういうところにリアリティーを持てないというの、美術をやっていてもそうです。自分の作品をつくるときに例えばペインティングをしようとするとき、もう歴史が見えてしまって、ある種自分がそこに絵の具を置こうとすることは誰かの絵の上に絵の具を置いているような感覚がある。そのリアリティーを大切にしたいんです。なんにもないところに手を付けるんじゃなくて既に他人の手垢が付いているところに仕事をしなければならないっていうバランスっていうんですかね、今の都市はそれらのものが複雑に絡んでいるんだと思います。

——あるものが転用されたり付け加えられたりとい

うもののでき方は確かに面白いですよね。でも、そ

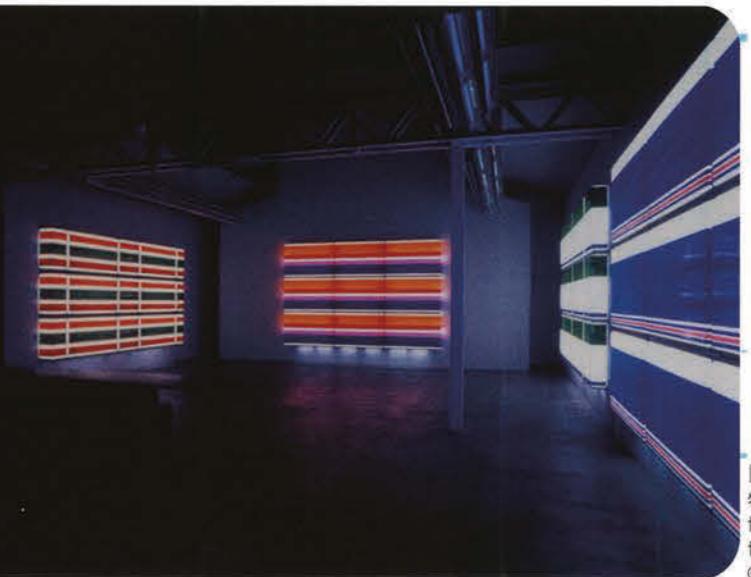
れを意図的にやろうとすると途端に面白くなくなる

ようなジレンマもあると思うんです。アートの話で

いうなら、例えば都市の中にトマソン的なものを自

分でつくろうとしても、本物のトマソンにはかなわ

ないような気がするんです。ある目的で建てたはずのものがぜんぜん違うものにつかわれていたり、ビルのフロアごとにミスマッチな機能のものがバラバラ入っていたりするというのも、それはいろんな人



『トヨタマーク』
東京 古屋ビル 1992

©masato nakamura

『TRAUMATRAUMA』 SCAI THE BATHHOUSEでの個展風景

特別協賛：(株) 煙草、東亜レジン(株)

協賛：(株) am/pmジャパン、朝日エティック(株)

協力：(株) セブンイレブン・ジャパン、(株) ファミリーマート、(株) ローソン、藤倉プラスチック(株)

©白石コンテンポラリー・アート



初期のプレハブ住宅M-1 ©積水化学工業（株）

がバラバラにやっていたからこそ、突然面白い関係を生みだしているんであって、それを最初からねらってやろうと思っても、なかなか難しいのかなとも思います。建築の場合にはクライアントを説得するのも難しい。東京の面白さの一面は、そういう誰も考えてないところ、コントロールされていないところにあったりするのかなと思うことさえあります。

意図的に恣意的なことをしてしまうことによって、僕らが眺めているときのオモシロさがそこには感じられないというのは確かにそう思うですが、ただ、つくり手としてこの街で何をつくれるかという判断になったときには、目の前の街のつくれ方を基準に考えなくてはいけないわけで、都市の形態に対してのつくり方の一つだと思うんですよ。全てをそれにしないといけないと、それはもちろん思っているわけではなくて、こちら側から見たらこういう機能があるけど、まったく考へてもいなかつ機能がプラスの空間として実はあったんだよ、ということを気付かせるとともに、そういう考え方ができるということを先駆的に見せていくれば、いわゆる今までの街の見え方というのもう一つ幅が広がるだろうし、ものをつくろうするときに考え方が確実に広がると思うんです。僕は眺めるだけではなくつくりうとする立場なので、それはやっぱりぜんぜん違いますね。つくり手側の意識だけで環境は成り立っているわけではない。完成したものが街の形態の一部になり、他者の意識によってどんどん変化していくということを、つくり手はよく考えておかなくてはならないということです。このようなことを意図的に仕掛けるということができるステージをアートとして考えたいと思います。

アートという枠組

これだけいろんなものが多様化してきていると、何がアートで何がアートでないかというのがほんとにわかりにくくなってきていて、しかも、最近ではエンターテイメント的なものが多くなりすぎてきているので、「そういうのはちょっと違うよ。」と言いたい。いかげんな悩みのようなものをポッと出して、そ

れぞれ変化する状態として、僕の中ではありますよ。ただそれは制度的な意味で発達してきたアートに対する不信感から生まれてきたものです。僕は正統なアートというものを勉強してきたので、逆にそこに対する疑問というものが表現衝動になってきています。だからこそ、いわゆる普通の美術教育と言われているものの問題が如実にわかるんです。自分の体で体験しているから。究極的にはやはり教育の問題ですね。

—建築は手垢にまみれたり、社会の垢にまみれたりすることが多いんですが、そういう立場から見たときには、アートの特権というものは必ずしも社会にコミットメントしていないことも成立し得る、してもいいかもしれないという点だと思います。そういう点で言えば唯一の分野かも知れない。そうなったときにアートが社会と積極的にコミットメントを深めるということになると、その特権的な何かを失うことになるような気がしたんですね。それはどうなんでしょう？ 自分の好きなもの、自分のつくりたいものを純粋につくっているだけでも、アートと言ってしまってもいいんじゃないでしょうか？

その人がどれだけ自覚的に、自分のしていることにメタな視点が持てているかということが重要です。たまたまそういう教育を受けてしまったから、その人はそういうことをやり続けているだけかもしれない。なるべくそれを、早く肩をたたいてあげて教えてあげたほうがいいと思います。それがアートの特権かというとそうではなくて、単に教育の弊害だったりするんじゃないかな。今この社会で山の奥にこもって、何かとんでもないものをつくれるかっていうとそれはないですよ。どこの国の人々のマイナーなところに行ってやっていようが、絶対面白い人はピックアップされちゃう時代になっている。だから、今の時代ではそういう側面はアートの特権とは言いくらいでしょうね。

アートでしか成立し得ないもの、アートでしかできないものに興味があるわけです。例えば、僕の作品でのマクドナルドのMをどこのジャンルで語ればいいかというと、あれはやっぱりアートと言われているジャンルの中でしか成立し得ないし、語れないよね。

それならば、こういうアートのあり方もあるんだよというような方向をもっととさぐるべきだと思うし、そのためには、ギャラリーや美術館の中だけでは、もう組織として人間関係として新しいものが生まれにくいんです。commandNはその点で新しい創造の可能性を導くプロジェクト・チームとして活動をしています。

— そういう使われ方はほとんどしてなくて、単に建物を産業として合理的につくっていくプロセスのいちばになってしまったわけです。ただ、一つ驚いたのは、箱が老朽化した場合、つまり住宅としての機能が終わった場合どうなるのかといったとき、大野さんはリサイクルを考えた。そのリサイクルという発想は、最初の開発時からあったということでした。今、M1がどこに現存しているかっていうのを調べてあるそうです。それで、M1のリサイクルを現実的に考へているといいます。リサイクルっていう発想で考へた場合、それをもうちょっと拡大解釈すると、今、目の前にある風景がもつてリサイクルされているんじゃないのか、もっと変化するスピードを早めることができるものなんじゃないかと思うんです。産業の問題もあるし環境の問題もあるので、ここでも一度M1を例にとってプレハブの利点をベースにした“住宅の考え方”というものを考えてみたかった。簡単につくれて簡単に壊せて、簡単に移動ができるっていうようなところを基本として。

— 僕らのような弱小建築設計事務所の人間にとては、建て売り住宅の持つ技術力とか、流通ノウハウというのはある意味では脅威です。

何もできないと思うかもしれないけど、そこに 대해서もう一つ考え方を発展させていくべき可能性が見えてくるんじゃないかな、というのが僕の考え方です。何もないところから新しい建物をボーンと建てるということは、今ある風景を捨てて新しいものを建てなきゃいけないわけで、そうじゃなくて、今あるこの風景の建物の構造をベースにして、もしくはその発想を変化させることでもっと面白いことがもうちょっとできるんじゃないかなと思うんです。そのもうちょっとっていうのが何かというの問題なんですけど。

— 住宅展示場に行って、構造の骨だけ売ってくれませんかって聞いたことがあります。内装や外装の最後のフィニッシュは僕らのほうでちゃんとやりますからと。できるんですかって聞いたんですけど、まだ返事はありません。今はまだ無理だと思います。



©積水化学工業（株）

ものを鑑賞できるようにプランしたんです。でも今回は美術館の構造の問題や安全性の確保等の理由で中止になってしまった。でも無理だと言われたおかげで建築のあり方が見えてきたので、またちょっと考え方が変化してきています。

今、僕が考へているのは無印良品的な建て売り住宅というようなものではなくて、どちらかというと従来の建て売り住宅に増築の考え方をプラスしていきたいんです。都市の形態の変化に積極的にかかわろうとするシステムです。それを僕がデザインしてしまって建築家になってしまったので、そういうポジションではなくて考え方を提示するというだけ、その考え方別に僕がつくっているものではなくて、今ある考え方をこういう視点で見るところ見えるんですよという視点のずらし方を提案したいんです。そこに美術の機能を与えていきたい。そこで、この都市にどうアートが機能し、私たちに何をアフォードしてくれるのかということを考えたいのです。



M-1の流れを汲む最新型プレハブ住宅 ©積水化学工業（株）

の悩みを私の今のリアリティーですって言っても、それは表現になっていないと思います。歴史を見ると、悩みのようなものではなく、考えが残ってきてるわけだから、その考えを打ちだすことが大事だと思います。膨大な歴史の中での自分の位置をちゃんと示した言い方にならないと、それはアートとはならないわけです。

要するにメッキの彫刻を街の特性に関係なくボーンと置くとか、裸の彫刻をボーンと駅前に置くことで、じゃあそれで本当にコミュニケーション・ツールになっているかというと、まったくならないわけですね。今はまったく機能していない。美術館の中でアートといわれたものをそのまま街にもつていってもアートとして成立しているか？ 単なる印象的機能しかないのではないか？ というような疑問もあります。しかし一方ではそういった大いなる誤解やズレが日本のアートの特徴ともいえますか…

OPEN



3P-chair

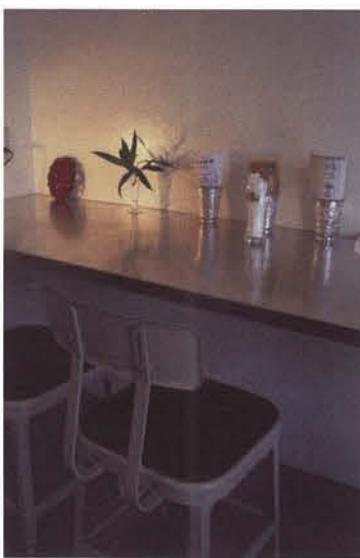


LIGHT + SIMPLE + EASY

¥7400



H=440mm
D=390mm
W=1250g



Sun Wukung is waiting for Tang Hsuantzang at

Cafe?
INDIA



Cafe? INDIA TEL/03-3314-0177
4-6-11 KOENJI-MINAMI SUGINAMI-KU TOKYO

024 A-works Cafe? INDIA

renewal design:arita yoshitaka, baba masataka, photo KATSU.(F.I.O)

角地にあって、高い天井と、通りに面した大きな引き違いの扉を持つその空間には、なんなく力の抜けた心地よさのようなものがあった。

杉並区高円寺にある、もともとカフェだったその場所の改装をした。

予算も限られていたから、とてもささやかな工事だったけれども、許される範囲内で少しづつ手を入れた。

おもてにあった、古くなったテントと看板をはずし、外壁を白く塗って簡単な看板灯を取り付けた。内部では、不要な壁をとっぱらい、新しいカウンターを付け、壁と天井と床のペンキを塗り替えた。蛍光灯は全部はずして、照明を新しくした。

イスを一部新しくし、観葉植物を持ち込んで、どこかで余っていた事務所用応接セットとスチールロッカーをもらってきた。

結局、ここでは僕たちはなにも新しくはデザインしていない。

それはただ、ルーズさをコントロールする作業だった。



昼間は“cafe?”（「お茶しませんか？」とも「cafeってなんだ？」とも読める）のこのお店は、夜10:00～朝4:00までは“bar!”になり、週末の夜は“Manuera cafe”というクラブになる。

リニューアル後、壁はギャラリーとして貸し出され、アーティストの持ち込み作品等の展示も行なわれている。

カレーも美味しいし、心地よい音楽も流れているし、なんだかのんびり出来るイイ感じのところです。

このお店には高円寺という街がもっている独特の雰囲気が現れているような気がします。